

アルツハイマー病

発症関連遺伝子を特定

新大脳研究所 桑野助教授ら 治療法開発へ光明

新大脳研究所の桑野良三助教授(神経化学)や国内四十五医療施設の医師らが参加する共同研究チームが二十九日までに、日本人のアルツハイマー病の発症しやすさに関係する遺伝子の一つを特定した。桑野助教授は、六月に米国ワシントンで開催されるアルツハイマー国際会議で研究成果を発表する。病気の解明や治療法の開発に結びつくことが注目される。



桑野良三助教授

研究チームは、遺伝子の解明を基に新たな医療

の実現などを目指す政府の「ミレニアム・ゲノム・プロジェクト」の一環として二〇〇〇年に発足。桑野助教授が遺伝子解析を担当してきた。国内四十五の医療施設の協力で、六十歳以上の対象にアルツハイマー病の患者約千五百人と同病の患者でない約千六百人の血液を採取。関連が指摘されていた「十番染色体」のDNA配列を調べた。同染色体は日本人で約千二百カ所の個人差が見つかっており、病気の有無と個人差の関係を比較。その結果、六カ所の個人差がアルツハイマー病と関連があることが判明した。

「ダイナミン結合たんぱく」と呼ばれる遺伝子の周辺にあった。このたんぱく質は神経伝達物質の輸送などにかかわると推定される。アルツハイマー病患者の脳では、このたんぱく質の量が少ないことも分かった。

研究チームは現在、すべての染色体を対象に、ほかに関連遺伝子がないか調べている。桑野助教授は「ほかの関連遺伝子との組み合わせなど病気の要因を解明し、予防策や治療の開発につなげた」と話していた。

研究チームは現在、すべての染色体を対象に、